

# Hello! FUJISEI

No.211

出生数の減少が止まりません。

厚生労働省の「平成25年人口動態統計月報年計（概数）」によると、平成25年の出生数は102万9800人で、前年の103万7231人より7431人減少しました。第1次ベビーブーム期（昭和22～24年）に生まれた女性が出産したことにより、昭和46～49年には第2次ベビーブームとなり、年間出生数は200万人を超えました。しかし、昭和50年以降は毎年減少が続き、平成4年以降は増加と減少を繰り返しながら、ゆるやかな減少傾向でしたが、平成13年からは5年連続で減少しました。平成18年は6年ぶりに増加しましたが、平成19年以降は減少、増加を繰り返し、平成23年以降は3年連続で減少しました。

平成25年の合計特殊出生率（1人の女性が生涯に生むとされる子供の数）は1.43で前年の1.41を上回りました。年齢（5歳階級）別にみると、20～29歳の

## 止まらない少子化！

# 出生数は103万人で 過去最少を更新！

各階級では低下、30～49歳の各階級では上昇しました。最も高いのは、30～34歳となっています。

「1.57ショック」と言われたときがありました。これは、平成元年の合計特殊出生率が、「ひのえうま」という特殊要因により過去最低であった昭和41年の合計特殊出生率1.58を下回ったときの衝撃でした。これにより、少子化が社会問題として広く認識されるようになりました。平成15年には「超少子化国」と呼ばれる水準である1.3を下回り、さらに平成17年には過去最低である1.26

まで落ち込みました。

長期的に人口が安定的に維持される合計特殊出生率の水準を「人口置換水準」といい、日本では2.07～2.08（男女の出生性比等の違いによって変動）とされます。この水準を下回ると人口が減少し、この水準を相当期間下回っている状況を「少子化」と定義しています。

15歳～64歳の生産年齢人口も32年ぶりに8000万人を割りました。少子化の進行は、高齢社会を支える年齢層の減少となり、介護や年金、健保などの制度改正も必要になります。

### 出生数および合計特殊出生率の年次推移

厚生労働省「平成25年 人口動態統計月報年計（概数）」

